



門 4 曾 4  
號 600  
卷 69

劉氏原評

壬辰

十二月廿八日早便狀中

封入 同月九日午後送到

抄評答書一帖十八

十二月十一日 郵便八日限出之畢

八犬傳八輯下帙愚評

上

孫



大徳寺の御書

Handwritten notes in red ink, including the name "Mitsunobu" (三好 実光).

Handwritten notes in black ink at the bottom of the page.



Main handwritten text in black ink, written vertically in columns. The text includes names like "Mitsunobu" (三好 実光) and "Mitsunobu" (三好 実光).

竹葉の唐紙註と衣の糸とぬきあはれしきまをくくする漢談

コレヲこれの糸は糸の玉をいへば指環スラはくしきりしきり

まろやとみしあはせぬかおのつきの糸とあつてぬ

しなぬきとあつてぬ地の河もきざしやとせむる

つよしとせむる係ナガラはくしきりしきり

あくめをさす信の糸又とこころをくかんえぬ

これら丸そのあつてよぐその物なるときりぬ

糸をくしあはせ入三人をくしきりしきり

してせむるやとせむる糸のさるさるあしきり

かゝぬ太おろぬ糸をかして衣糸を主人

ゆのしきりぬ証候ありやとせむる糸とせむる

あつてはくしきりぬ糸のつみりしきりぬ

ゆあゝのさるさるぬ糸と氷炬の家め組ん

白とぬきしきりぬ糸の組んぬ糸とぬきの糸中書

ふしぎな糸を糸のさるさるぬ糸とぬきの糸

きりぬ糸のさるさるぬ糸とぬきの糸

糸のさるさるぬ糸とぬきの糸ホ玄

糸のさるさるぬ糸とぬきの糸サカ

世を今後とせむる糸のさるさるぬ糸とぬきの糸











あつねの... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
し... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
ら... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
あ... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
る... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
や... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
き... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
ら... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
り... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
り... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
り... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
り... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
り... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
り... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
り... 必<sup>カナ</sup>たれ...

あ... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
い... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
そ... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
た... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
ま... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
ま... 必<sup>カナ</sup>たれ...  
ま... 必<sup>カナ</sup>たれ...

しるるりかたは思ふは返さるる  
極みさつしる舞としてまを  
たれどカラストコロ  
一柱のう人たしつたせのめあきらりかたは  
ろりりかたのめあきらめさ  
てさるるりと舞を歌ううたは  
よあはなごめはめ巧威一しりりかた  
たをあらまおなまへん人  
銚子をうるものかたかこま  
ふかかくともあまふあまふ  
かたかたきさへりまづ  
としふ次序の比事めし  
よかたの能とつらまは  
らいとほふかたのたふ  
かたのなほおのたふ  
しあつしるかたかた  
まをたけおのたふ  
まをたけおのたふ  
まをたけおのたふ

てしるるる

てしるるる

ぬゆゆと固きとてつりまづ可きとて女世の足  
くありし事なきにありし故に仲とる事ありし  
此物にこそ注いふなりし事故に世民に故に  
先きのぬきし水師仲あるに思ふにこそ亞  
一山塞しとてありしとて操舟藤胎城ナラヌ  
義介の地りありしに守りてをかくしとて  
ありしとて瓜後小幡ナダラを待てはりしとて  
却も子ありしとて勇気とておん後思ふに事ありしと  
討ふとぬきし固きとて故きとて女世ありし

故に吾に故きをのひありしにありしとありし  
八丈の中道ナラテとてありしにありしとありしと  
知れりしとありしとありしとありしとありしと  
五十子故を討ふ一議固きありしとありしとありし  
軍陣ありしとありしとありしとありしとありしと  
キクもむとありしとありしとありしとありしとありしと  
尺もむとありしとありしとありしとありしとありしと  
引つりありしとありしとありしとありしとありしと  
とありしとありしとありしとありしとありしとありしと

ほろろとさうあたるはるもあつて

わよニきりうや太打大釣をさそせたてあ

そのけ男をさそひてあつてあつてあ

るを戸のおま

理滂るんそつてよあつて一ツ賢婦人の

さぬあつてたのたはの絡をいさすま

いつをさそめ絡あつてあつてあつて

らめくはつて威放つてあつてあつて

よくそつて刑さつて権度あつてあつて

あつてのるんをよいさすあつてあつて

はのりあつてあつてあつてあつて

詰ひをさつてあつてあつてあつて

くつてあつてあつてあつてあつて

はるあつてあつてあつてあつて

るあつてあつてあつてあつて

美をよいさすあつてあつてあつて

敦厚よいさすあつてあつてあつて

儀ありたむあつてあつてあつて

御ありたむあつてあつてあつて

御ありたむあつてあつてあつて

御ありたむあつてあつてあつて

御ありたむあつてあつてあつて

御ありたむあつてあつてあつて

その年々二款の事を法了るるおとそ  
信のほほほとていそいそと感度

田大士流く大飼大村指月池と註くあるの  
外果うまむのいぬ右二土より使れきて大川大田  
めり年大坂のりると告越くく大坂大山大川  
指月又ゆしむいぬをさすすくせり

大田大坂めりるといふ又つきの大川  
大田指月とゆれ来る所の文句よきとそ  
也てふふのり大村のり大坂大山の

る年大坂めりるといふ又つきの大川  
し多居て入る孤枕の響くおとそいふ  
文外の金情いとゆくる又大村大坂と  
八大具足男れみくく指月の後任とそ  
くろ丸物同急とく出つたあ事  
ところ是とお物そくもところしてあ  
八玉とせくとあてむとくうあつとそ  
あしめりく那大坂のり使れよ告て大坂  
保め胸のいぬくお湯をひ大坂のり





めそ好紙を思はばさうさうか二厘とあやま  
ふし、大の、ちた、ちあも、し、は、の、を、ゆ、を  
こそあかきとみ、さう、さ、片、行、を、さ、さ、あ、あ、あ、  
こきん、こ、情、を、さ、さ、さ、さ、さ、さ、あ、あ、あ、あ、あ、  
坊の好紙、おど、肩、柳、乃、人、と、お、お、お、お、お、  
あ、れ、正、こ、れ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
え、る、い、を、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
物、あ、も、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
る、う、こ、し、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
よ、ら、も、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
道、子、う、再、後、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
いと、さ、い、し、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
雨、士、あ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
お、ど、う、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
信、乃、ゆ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
信、義、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
四、九、里、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、





一歩射ん時をうそに天し今しに心よんら  
んのみ風きくしくおぼしとあし  
よし方程のさしと主我心とさしとあし  
ろし<sup>道</sup>そそあひくよ<sup>五</sup>すの<sup>の</sup>おて<sup>を</sup>  
うひりう<sup>な</sup>ま<sup>ら</sup>ひく<sup>し</sup>よ<sup>は</sup>さ<sup>し</sup>よ<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>よ<sup>ら</sup>  
毛<sup>ひ</sup>も<sup>遊</sup>遊<sup>や</sup>う<sup>お</sup>け<sup>の</sup>お<sup>の</sup>た<sup>の</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>よ<sup>ら</sup>  
湯<sup>の</sup>又<sup>す</sup>う<sup>て</sup>い<sup>遊</sup>遊<sup>や</sup>ん<sup>よ</sup>も<sup>ら</sup>らん<sup>よ</sup><sup>の</sup>け<sup>ま</sup>  
う<sup>の</sup>ん<sup>と</sup>お<sup>け</sup>の<sup>お</sup>た<sup>の</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>よ<sup>ら</sup>  
遊<sup>の</sup>の<sup>よ</sup>ん<sup>し</sup>は<sup>お</sup>し<sup>れ</sup>る<sup>の</sup>遊<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
より定正と討つ<sup>は</sup>を<sup>も</sup>ゆ<sup>ら</sup>ん<sup>ら</sup>  
お<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>風</sup>を<sup>く</sup>

湯島のあまうし今あて多と<sup>昔</sup>まか<sup>を</sup>して  
つう<sup>や</sup>や<sup>の</sup>お<sup>の</sup>ひ<sup>ら</sup>り<sup>し</sup>く<sup>は</sup>の<sup>お</sup>の<sup>の</sup>  
お<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>の</sup>お<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>の</sup>お<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>  
し<sup>あ</sup>て<sup>ら</sup>ん<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>  
ま<sup>ら</sup>ん<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>  
ま<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>

ちよめい美々女ツギハ 赤城の山にありあまのわら  
毛地ののあつちほろくをくぬしやうしに云ひき  
口上し衆およこの言のまといとよの言の別は太  
おのきあうふといまを物中帯にわらあつく  
そのうちちゆくしくぬるのきゆきまら  
くちゆうしやなるあいのぬのちをあら  
流るるるる風きくしくるくをさく

水師の本を思ふ史進のいよほどさの厚あはし  
樹とに極むけりりんさよどそのくかあふに  
よめいあはれいあつちをまんてんあはれあ  
のいさ帯のうからぬ之両士相法の高を  
をも感得のりち論した二三葉一節の  
相法無しといふべしや道なるものえれ  
あつちあめの眼と遊んであま道に十のま  
よいこうちをいふるも毛地はあつちを知し  
あまいし見あわなあつちを御たう向ても  
あつちをさるれあまのいれさうのちとまごら  
そまいつらさるあつちを名のやさく文を又あつち









司馬濱の仇まづお丁うす丁の仇文り奇  
絶いし疾子ぬる控也玉龍にけきりふ面の  
きつ川ゆいぬ娘ぬるふりさう龍にのり  
そまろくたるうとらほが道りさふあかん出案  
るの度大舟をり感あり聖徳のさく所の  
老安一人から地え同慶をまつりあしおび  
けの世かまういせり系同信体致す以下め文  
句まろく奇絶いし海運神さうりそ又ほが道  
りさうぬるしお丁まろくさうらふり奇絶い  
とやゆふこととさうにけきりさうくさう教  
ふり苦むゆきさうさうかめゆきさうかく  
自ゆとゆ中らうりけぬるし話説ス  
今いさうさうさうゆきさう<sup>トテモ</sup>くさう  
殊地傲ふもゆきさうり牛のゆき  
お中らう鬼屋のまきさうりさうりさ  
鬼屋の名のまきさうりさうりさ  
殺さるる牛さうりさうりさうりさ  
めさうりさうりさうりさうりさ

おれも昔おぼろ見えたりとついでに  
うさや小文書の前を覚えておぼし  
の漢字も読めどもをいへるおぼろ  
一息をうきまふ一息をいへる  
ふく教をうきまふ一息をいへる  
おれ人の言をうきまふ一息をいへる  
おれ人の言をうきまふ一息をいへる  
おれ人の言をうきまふ一息をいへる  
おれ人の言をうきまふ一息をいへる  
おれ人の言をうきまふ一息をいへる

御書

御書



八犬傳八輯下帙愚評

下

罪紙七名  
有子分  
有子分



八代新編...  
...  
...

...  
...  
...

かひてあひいさすおつくそせユルにぞあふ  
とゆいけくあふいあふささるにこそまふささ  
ぬこのあつくさるせユル<sup>アテ</sup>あふささるささ  
あささあふいさゆのあふささるささるささ  
すささーニ士のあふささるささるささるさ  
又ワアくのやまささーあふあみまのあしあ  
たたのあふささるささるささるささるささ  
脚を地あふささるささるささるささるさ  
くえをさゆささるささるささるささるさ  
まひのうさあふささるささるささるささ





の守性子御さうくしてぬしちんく  
おゆま七丈士の勇烈信は云々子御優  
劣なき中みあつらふん工ゆるるのぬを  
又何となくそのほをくしんしぬにふり  
感あるとお引馬は水餅の白龍廟の替り  
ありはぬ華彩本よあまたぬるもこと  
比ふりあつらふいあつらふり  
ぬし七丈士里見こつては後ハ  
績ありトその軍陣●にむとより出かき  
あつらふ九路団系ちんいす七の丈せ  
ちんく

甲冑せしその軍ありさしあつらふ  
七丈せしそらして千三つとほとよき  
ちんく  
子の母はハ  
相の一條あり又又二匹のり  
まこととあつらふとめしあつらふ  
ぬし九路を信を拍まぬるさう  
ぬのーかへ陸ぬさうあつらふ  
むそらんちんあつらふ理りれ  
ちんく



ほそそい岸をたぐりてあつてさままに湯へは  
ほぞん茶のこもる大角のふおろせり  
やいし大角のまんに文臣のうらもまに  
さのみしきまもあめうたんとその文の文然  
ふと大角の一ひいせむせめゆに九ぬにさる  
そとらふねえいれ衣をかこらあさこも  
はとらふやいこも赤雲むえ一の所をさめ  
あの木まゆの又まゆみのうらむしきま  
大角のむいふのうらまらまゆめうとや  
目よわかきあゆいれ一ゆもむかこらせり

むいそん毛をゆての瘡ふさる十糞下入下葉下  
みまみ理ハ二教のし文術をつくまといふ  
いまるたさとまらうもあゆふらんま  
大角のふめむらうも大角のふら  
てい三人角を信とてそのユススバカしそや  
そのユススらうにねん二教といひこくさ  
大角のふらもカを岸上にあつとらん行々地  
かーゆらうをつけてめつあさるこもあ  
ほとりねん人にて大角のふらねんちてふ  
ちうそふらうつらふらユススバカし





物いふは鹿子河程が月をうつける  
 まはれハこそよれや河程の邪おきん  
 みのるをいふはまふはあは下枝をさ  
 ぶ本とどろし又たゆめいさけひかちるハ  
 柳のうらひさう毛せうそいふは原の  
 一矢よりのまぬ 柳三つおくらうのをさ  
 ようつらうあう勿落ちくそ一してゆくと  
 ちうまにあれハ身ごとくせんたさうさう  
 毛地片言の問と答しどわゆるそいふも  
 とふといふとくかといふかきさうそいふも

船もとちあまそろ人の木を船にゆか  
 ましやし又船をゆめまそめそまの  
 庭のしをあらうと雪坑の下に雪をかき  
 けし山に黒いふふ又大白山にわたり  
 雲又ぬる雲りいそけるさつけらる皮書  
 套をて用はへさるる人理とあきとて  
 わへきよあはしあふく今かあ  
 とらけよめかきうらうらよあまほく  
 そい  
 穴さうにせいでいねらうらうのんハ





六の号を七丁の九行標ハ標ハありぬらん今一十あるは  
七の号を八丁のう七行勝解のありぬらん  
八の号を十丁のう二行三行成朝のたまりぬらん  
成氏のたまりぬらん  
十の号を十丁のう八行社禮ハ壇ありぬらん

九の号を十丁のう九行

十の号を十丁のう十行

簡の事隋唐演義ありぬらん今一十あるは  
しつてさうしつてさうしつてさうしつて

四回秦叔宝ハ衣ありぬらん今一十あるは

若論他本領使得鏡射得箭還有一庄獨脚  
凶義他祖傳有兩條流金匙銅筒称来可  
有一百三十筋他舞得采初時兩條怪蟒翻波  
後來一序雪に改地

十四回叔玉羅漢云々今一十あるは

筒ハ銀筒とて遠兩條筋連金鑲靴子共二重  
六十餘斤

圖書のあまゝ 九七のキム

---

たゞいふ身置きしが、いふにふまゝのむき  
たゞいふことごとくいふことごとく

かみ穴のほろり矢れなくおせらるるせき  
籠籠より  
都に揚給ふ一種大まかりおをとも  
しこといひてこと  
いひてことかまゝいひてこと  
おに穴居もいひ  
よゝあるくふふと、いふ鹿馬とのつゝもいひ  
は一笑

あまのまゝのむき  
いふにふまゝのむき

いひつるにありまゝいひつるにありまゝ  
 ありまゝいひつるにありまゝいひつるにありまゝ  
 ありまゝいひつるにありまゝいひつるにありまゝ

一桂家評是評本也く海に

乃本も評はひくふ身はつる也

きく一並本也あふ代寺しき

評を今桂家か評一評之

封くつる也移つてしき

つる評もごとく桂家評

ひくも評評なとらあしき

いひつる本也つる評

評本も評もつる評

評もつる評もつる評

つる評もつる評もつる

つる評もつる評もつる

つる評もつる評もつる

つる評もつる評もつる

つる評もつる評もつる

つる評もつる評もつる

と笑く、大女傑まらう  
ちかきまゝのひまをうらまへ  
怪然あはれ思ふまじらふも  
よ〜んつて、いふことなか  
半とつて、又司馬信正  
さかきやうをあらわし  
とる湯島の條、いふもの  
さ〜い〜い、利中よ  
よ〜い、いふ、いふ、いふ  
わ〜い、いふ、いふ、いふ  
ほ〜い、いふ、いふ、いふ  
あ〜い、いふ、いふ、いふ  
い〜い、いふ、いふ、いふ  
い〜い、いふ、いふ、いふ

源介

十二日 籠

若代主人

